

An Artist in Japan

明治日本を描いた画家 ロバート・ブルーム 第三部

文・挿絵ロバート・ブルーム (Robert Blum)
スクリブナー誌 (Scribner's Magazine)、1893年
訳 大野順子 Rothwell*

国府津から東京間の揺れの激しい列車を降りた時¹、ピーター（葛飾さん）は「子爵の長男だよ」と言いながら彼の友人と私の方にやって来た。「ミスター・ブルーム、あなたに私の友人の子爵を紹介させて下さい。」私の日本の若者のコレクション、それは未分類でたいしたことはないが、その中に新しい、非常にまれな標本が一つ増えるのを私は嬉しく思った。

彼は私に会って嬉しそうだった。「私はとにかくアメリカ人はみんな好きなのですよ、長い間アメリカにいましたからね。」と言った。我々が宮ノ下に行こうとしていると聞いてと喜んでいて、どうやって行けば良いか一番良い方法を教えようと親切にさしでがましくお節介をやいた。彼はたびたび宮ノ下へ行っているのです、彼の言葉で言えば、「そこについて精通している」ということだった。「あなたは宮ノ下が好きになるでしょう、外国人は誰でもそうですから。もし歩くのがお好きでしたら、駅から宮ノ下まで4マイルかそこらの距離ですよ。」人力車は暑くて乗り心地は良くない。それでピーターの助けを借りて、実際に人力車に荷物がちゃんと適切に納まったかを確認したあとで、我々はその後を歩きながら非常に



田舎道

* 翻訳© Junko Ono Rothwell 2014

¹訳注：第二部で書かれているように実際には国府津から湯本まで馬車鉄道に乗ったので降りたのは湯本。

活発な会話を始めた。実際、子爵が何も言うことがなかった場合のみを除いて会話は決して途切れたり遅れたりはしなかった。

子爵が自国語（日本語）でピーターに話をするのに見下すような態度を取った時、ピーターはまるで蛾が光に惹かれてまぶしい光でくらくらして気後れしたように私たちの会話の外に置かれた。ああ、野心的な夢のピーター！これこそ君の理想的な会話なのだろうか？

「そして、あなたは その、好きでしょうか・・・」と子爵は私に尋ねた。「日本のこと？」と私。彼が問いを終える前に、私はなぜ私は日本の何がどうして好きなのか、長いあれこれの疑問をめぐって混乱した。彼は、その後しばらく黙って歩き深く考えにふけた。

「しかし、物事は、どう言えばいいのか、ちょっとのろくて退屈だとは思いませんか？」と子爵は聞いた。

私は多少喜んで、これが事実であることを率直に認めた。

しかし、彼が言った意味は「面白い事はない、ダンスもないし、何もすることがない」という事だった。もちろん、外国人に、日本は面白いかもしれないが、彼のようにアメリカから帰国したばかりの人には、本当のところ、「あまりにもものろのろしている」ということだ。とても長い間アメリカにいたので、それに慣れ、日本になじめなかったのだ。「私が“生の英語“を話すのがどんなに楽しいか貴方はわかるでしょうか？」彼はアメリカで楽しい時間を過ごしたし、向こうで何をしたのかをいろいろ話して私を楽しませた。が、「ハーバード大学での時間は終わり、父に呼び戻され、腰をすえなければならぬ」と悲しげに付け加えた。実際には、彼の父は彼が政治に進む事を望んだ。父のせいで結婚の瀬戸際にいるのだった。そうなのだ、父は今、彼のために家を建てており、彼はアメリカの家の快適さを取り入れる方法を考えるのに忙しかった。家の変更のアイデア、彼自身の工夫の詳細を語り続けた。私が正確に覚えていれば、入念な計画の中にはビリヤードの部屋さえあったのだ。

この単独会話がまれに途切れた時、彼は大学の合唱団の歌を口ずさみ、ちょっと耳にした最新の人気のある曲を口笛で吹いた。笑みを浮かべて、それらを口ずさんだ後で、「あなたはこれを聞いたことがありますか？」と言った、「ところであなたはボストンで誰か知っているのでしょうか？ 私はそこに友人がたくさんいます。」オリバー・ウェンデル・ホームズ博士²をととてもよく知っていたし、彼の家を頻繁に訪れたそうだ。博

²訳注： Oliver Wendell Holmes, Sr. 1809-1894 作家、医学者。ハーバード大学医学部教授。その息子、 Oliver Wendell Holmes, Jr. 1841-1935 は最高裁判事

士にかなり夢中になっていた。どう言うわけか博士といっしょだと常に自由に感じ居心地が良かったらしい。他の人にも好意を持っていたが、あまりうまく付き合えなかった。彼が友人をたびたびは訪問していないため、博士がかつて彼をさんざんしかつた事を彼は思い出した。子爵は、「キリスト教とジョージ・ワシントン以外の何か他のものについて話すのでしたら 私は訪ねて行きますよ」と答えた。それを聞いて博士は心から笑ったと彼は述べた。しかし、彼の言った意味は、外国人扱いをされるのが好きではなかったという事だ。

しかし、我々の登山のことを述べたいので その時書いた私の手紙に話を戻す。

箱根、1890年8月6日。

親愛なる-----へ。 雨が降っている。それは雨と言うものか—雲が通り過ぎる時一度にざーと全部の水を落として空っぽにして下の谷に流したのか？ 水の幕—いや、それはあまりいい表現とは言えない。水の塊。とてもうるさい。君も知っているとおりに、神経質な私だがなおさら耐え難い音だ。一日中降り続き、まだ止む兆しを見せていない・・・最後に君に手紙を書いた海岸、江ノ島から遠く離れて旅してきた。この三日間、我々は登っている—楽な楽しい山登りだ—鉄道の終着駅、湯本という駅から宮ノ下まで歩いた。宮ノ下で私たちは一晩滞在し、翌朝非常に早く出て、山を超えここに着いた。

我々は、日の出に江ノ島を出発した・・・宮ノ下で昼食を取った。言い添えるが、湯本から山側までの徒歩は、若い日本人（子爵）に活気付けられた。彼は英語が流暢でほんわずかLの発音を逃し代わりにRを発音する。日本人はみんなそうする傾向がある。ボストンっぽさは彼の服にさえ感じられる。少なくとも私にとっては、全体的にみたら、上質で希少な若い世代の日本の標本だ・・・

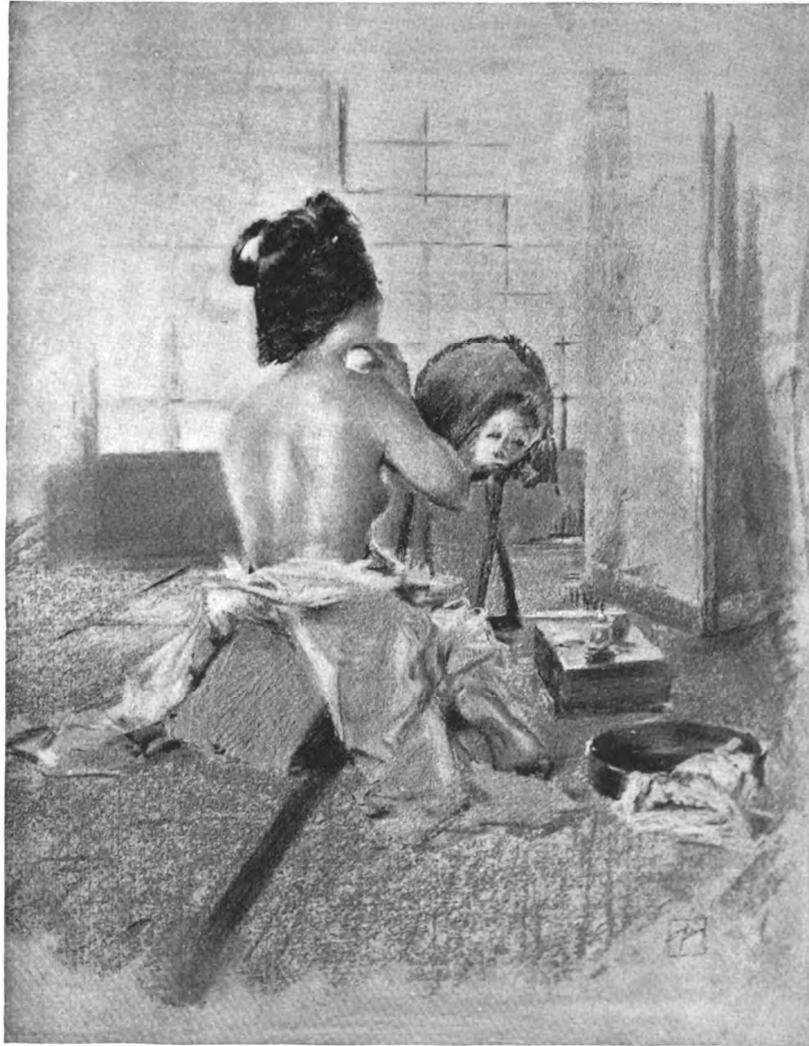
宮ノ下の説明については聞かないでくれたまえ、私に聞く価値はない。私は良い友人であり、悪い画家として断言する。それはちょうど人々からそれについて話を聞いたあとで、偏見によって、実際に見る前にあなたの心に「評価」されてしまう場所の一つとなってしまう。女性の観光客が東京のホテルで「素敵だわ」と大げさにしゃべっている場所を私が好きになれるわけがない。女性にはホテルもまた「すべて素敵すぎる」だった。³ 横浜もそうだったがここも日本らしい所ではなかった。一箇所だけ宮ノ下の近くの溪谷を下ったところに小さな場所がある。キングとかキガとか呼ばれる魅力的な小さな場所だ。⁴ これについては書く価値がある。

³訳注：この後に “Then she called the place Me, an oyster to finish with” が続くがこの意味不明。Me とは地名か？

⁴訳注：木賀かと思われる

我々は日の出前に起き、箱根に向かって山を登った。涼しい早朝の歩行は快適だったが、しばらくして太陽が強く照り、上り坂の歩行はきつく体にこたえ始めた。その前、まだ日が昇らないころは前にも言ったように、それは新鮮な、明るい朝の景色や音の魅力に満ちて十分楽しかった。鳥の鳴声をたくさん聞いた。二つ長ったらしい旋律でさえずる鳥—あまりにも口笛に似ているので人間と間違えるかもしれない—ただし、甲高いスタッカートで終わるので鳥だと分かる。日本人はあまり口笛を吹かないけれどもし吹くなら少年の唇から出たような音だ。独特の魅力がある美しい田舎を通り抜けた。楽譜をみせても生の音楽が伝わらないのと同じように写真や絵をみせてもその美しさを十分伝えられない。画家としてよりも、人間としてもっと印象的で美しく心を動かされたのは特徴的な—絵には描けない—山の風景だった。

なんて事だ！これはとっぴな日だ！君にこのかけらでも送る事ができればいいのに。我々の滞在している小さな宿は、ちょうど湖畔にあり、湖水は君と私がそれを何度もカサ・ヤコウィツの私たちの小さな部屋から見ていたヴェニス(Venezia)のラグーン（潟）のようだ。たたきつけるような雨と激しい風がそこと似ている。遠くでは風が麦畑の上を舞っている・・・箱根は、最終的には東京につながる道路に隣接するいくつかの六十かそれ以上の家屋の線で構成されている。ちょうどここで、湖に触れその周りをぐるりと回り、それから離れて、曲がりくねっている。どこに行くのか私は知らない。湖の水は、氷のように冷たい。ここに来た最初の日、水浴びしたから私はその冷たさを知っている。君にこのそそっかしい冒険につながるむしろ面白い苦境を伝えよう。ちょうど湖の端に、小さなあずまやがある。そこで私は着ていた日本の着物を脱いで湖水の中に飛び込んだ。すごいだろう！泳いでいる時そのあずまやに日本人が二人やって来たのが見えた。意外だ、どうしよう！水は、その前に十分冷たかったが、すぐにさらに約五度も冷たく感じた。私と一緒にいた日本人の友人はもうどこかへ去ってしまった。私は一人でこのかなり奇妙な問題を解決しなければならない。さて、私は一日中水の中にいるわけには行かず、最終的に私は水から上がった。どうやって出たかそれは聞かないでくれたまえ、とにかく出たんだ。何とかあずまやまで行って親切で丁寧な紳士の手から私の脱ぎ捨てたものを受け取った。小柄な婦人からはタオルを受け取った。言わなくてもいいが、その時拭く時間がなく着物をすぐ羽織った。全体の事件は今それが終わって見たらばかに簡単なものだった。私は彼らの目に、途方もなく間抜けに写っただろう。私はあまりにも野蛮人で西洋的な恥ずかしい気持ちで日本人のように見て見ぬふりをして自然に振舞う事はできなかった。次回ほうまくやろうと思う。もし冷たさに青くなって震えていたら、適切な振る舞いは無理だと君は分かるだろう。



化粧

我々はとっくの昔に見るべきところは見飽きてしまった。湖の向こうまで行く事ができたかも知れないが、この荒れたひどい天候のためにどこにも行けない。この方向に行くと寺がある。（そして無数の石段を高く登った後で寺までたどり着いてもあまり見るべき良い景色はない）もう一方の方向へ行くといつのまにか田舎に出ている。町のはずれには墓地がある。この墓地より陽気なものは一つもない。墓地は決して訪れるのにあまり興味深い所ではない。私はいつも誰か見知らぬ人の神聖な家に土足でずかずかと音を立てながら入って行くような気になる。作りたてのお墓の前で、二足の下駄を見たことがある。一足は小さなものだった。かなり磨り減っていた。かわいそうな幼い子。最初の下駄が示すこの世におけるわずかの間の存在。

ここからの富士山の眺めは私が期待していたものではなかった。大部分は隠れ、高い山頂だけを湖の反対側に見せていた。私は富士山を見るためだけにここに来たのに。私は多少がっかりした・・・

箱根湖を横切って運んでくれた舟からよじ登って外へ出ると 15 マイルの徒歩旅行が私たちの前にあった。我々はすぐに目的地の御殿場との間にある山々の尾根にたどり着いた。前日の荒天の後、太陽は再び輝いていた。そして多くの雨はほとんど効果をもたらさなかったのに気づき驚いた。土壌は、吸い取り紙と同じように、きれいにそれを吸収していた。山のほぼ峠の頂上に向かってジグザグ状に斜めに走った狭い道は腰までの高さの笹で覆われていた。我々が後にした樹木のない谷をいろいろな角度から見る機会を与えてくれた。多くの点で独特の谷だ。崖で囲まれ、谷底から急に青々とした台地がせりあがり、遠くの山脈はまだ続いて伸びている。形成のその壮大さ、その印象的な人里離れた場所。広大な飾り気のなさの中の神々の住みかのようなようだった。

我々が休んだ頂上は、眺めが見渡せるので一般的に「美しい」と言われている。個人的には、私はパノラマを好きではない。「規模が大きい」からといってそれが必然的にすばらしいとは言えないと私は考えるし、多くの画家たちもそう思っていると信じる。いずれにしても、今のところ私たちの眼下には、この大規模な平原が広がっていた。周りには果樹園や湖や村があり、他の眺めと同じように、地理を研究したいと思ったら何時間でも過ごせるだろう。富士山は雲の中に頭を隠して、彼女もまた同じ眺めに飽きて数時間の平安を得ようとしている。

私が唯一関心があったのはおしゃべりなガイド（子爵）が御殿場を指差した時だった。長く曲がりくねった糸、つまり鉄道の側に横たわったミニチュアの御殿場、悲しいことにそれはそこに私たちが到達するまでにかかる時間を反映していた。

御殿場。私はここまで登ってまた下り、「富士」を見に来た。箱根では手前にいろいろあって富士山はほとんど見えなかった。ここでは、すべて富士だ。正直に言うと、私は富士山を描くのにあたって二つの「前景」を選択できた。広がった鉄道の駅、牛舎のような建物、無塗装の木材のシンプルさの中に汽車とざわめいている群衆だ。もう一つの選択は、山に向かって数学的な正確さで伸びている広い、その荒涼の裸を隠すための木や家のない、長く美しい埃っぽい道だ。

我々が泊まった小さな茶屋は富士山へ登る巡礼であふれていた。徒歩旅行の代わりに車で御殿場まで来て二、三日間の山登りのためしっかり準備を整えていた。巡礼は常にごちゃごちゃしたこの通りを通過してグループごとに富士の頂上へのルートの中で最初、つまり一合目の休憩所へと向かった。私は、ピーターが箱根からの峠での昼食の残り物をかき集めたサンドイッチをむしゃむしゃ食べながら畳の上にしゃがんだ。茶屋の非常

に制限された食料貯蔵室からビール一本とわずかな卵が追加された。その間に私は隣の部屋の陽気な連中の声を聞くことができた。向こうの人たちの事がもっと分かったのは部屋を仕切っている薄っぺらな紙の障子を風が浅い溝から引き上げて吹き飛ばしたからだ。そして思いがけない非公式の紹介につながった。いろいろなありさまの裸体の物見遊山の人たち。皿、お盆、コップがごちゃごちゃと散らかっている。多様なたくさんの衣類、手荷物、順礼の装飾品が床に散らばっているのを眼にして驚いた。陽気な連中は普段着を脱いで まっさらでシミ一つない白の初心者からくすんで旅の汚れが付き文字の書かかれた着物の経験者までいて、その巡礼用の着物を今まさに着ようとしているところだった。彼らは東京から毎年の恒例の富士登山に来ている縫製の組合の人たちだった。大人の威厳を捨てて、男子生徒のような熱気にあふれ、長期休暇でリラックスしていた。私はここが富士登山の出発点であることを理解した。そしてこの人たちの旅は短期間の予定だった。田舎をあちこち通って根気よく何百マイルものうんざりする徒歩の旅で足を痛める本格派よりも、このようないいかげんな巡礼の方がもっと元気よく健全な旅ができるのではないかと私ははっきり感じた。

絵になる場所が欠けているこの場所にとどまることは無駄だ。⁵ もう少しまともな場所が見つかるチャンスはわずかしかない。これ以上時間を無駄にしたくないので私はただちに東京に帰ることに決めた。思いやりのある小柄な女将は巡礼者から邪魔されずに安らかに休めるようにと離れに部屋を取ってくれた。私が翌朝目を覚ましたとき、太陽は雨戸の節の穴から部屋を横切ってぼんやりした線を作り、反対の壁に黄金のきらめく点々を作っていた。お茶と小さなウエハスの朝食、これは出だしのサンプルとしては良かったが期待したのにそれ以上は貰えなかった。我々はこのんびりと始発の列車に乗る準備をした。そして、横浜まで、長く熱い、埃っぽい乗車だった。夕方近くにピーターは都内のホテルのととても喜んで少し興奮した様子の従業員の手に私をゆだねた。

⁵訳注：ブルームはこの旅で何枚か富士を描いたが気に入らず消してしまっただけで絵は残っていない。
Bruce Weber, Robert Blum and his」 Robert Frederick Blum (1857-1903) and His Milieu,



芸者

私の素描を何枚か見たいという出版社側の始末に負えない欲求⁶があるという私の記憶を呼び起こした有毒な電報の結果として、私は今、非常に忙しく、仕事で大変だ。足を上げまっすぐ伸ばし、さあ やろうと腕を引き締め、仕事に深く興味を持ち始めていた。その時ドアを叩く音がした。私はいつも自分の労働の真っ只中にじゃまされるのはむっとする。だから私はぶっきらぼうにつぶやいた。「入れ！入ってくれ！」

ドアが開き隙間からピーターの姿が見えた。彼の顔は満足げで晴れやかだ。「とうとう手に入れた！ 貸家をみつけたぞ！ 君が欲しいと言っていたような小さな家で大きな庭がある。」

そして彼は近くの家を教えてくれた親戚を訪ねて行った様子を話し始めた。「この二週間かそこら空いているけど、おそらく葛飾さんが探していたのはこんな家じゃないかな」と親戚の人が言ったのをふと思い出したのだ。

「それで」私はこの時点で言った、「君は一ヶ月以上も前に、友人に話してみると言ったんじゃないのか？ 彼らは何か聞いたら君にすぐ知らせてくれるはずじゃなかったのか？」

「ああ、そうとも、もちろん私はそう頼んださ」ピーターは答えた。「でも彼女⁷が何か見つけたかを調べるだけのためにわざわざ出向いて行く事はないさ。それで今日の午後まで行かなかったんだ、分かるだろう？」

分かるさ、日本人は目の前にある事は物分りが良いのだけれど、先が見えなくて計画性がないのという事を私は早くも学んでいた。単純な物事をしたいのにまわりくどいやり方になってしまう。この傾向には時々いらいらして少々腹が立つ。

ピーターはこの寡黙な叔父が見つけた家を見て行った。そして彼はまた、その所有者と話した。彼は、外国人の友人が日本家屋を借りたいという望みを説明した。

「そして、」ピーターは付け加えた。「君が気に入るだろうと思っているよ。これこそ君が欲しい家だ」「これこそ」に重点を置いて、日本人がある言葉を強める時に吐き出すしわがれ声で言う。「今 忙しくないんだっただら見ることができるよ。家主が家で待っているから」

それこそ小さな家だった。その全体が、自宅の私のアトリエにすっぽりと入るだろう。庭、つまり植物や低木があれば庭と呼ぶだろう空き地は、まさに私の必要としてい

⁶訳注：スクリブナー誌の「ジャポニカ」ための挿絵。著者エドウィン・アーノルド卿からたびたび催促されていた。」 Sir Arnold's Letter to Blum, NY Public Library

⁷訳注：ピーターは時々間違っって彼、He と彼女、She を混同してしまう。

たものだった。庭にならないからこそぴったりのものだ。モデルの屋外のポーズのために非常に良い場所だった。それと立地が便利な場所なのでより良いものが見つかるまで一、二ヶ月間借りる事を私は決めた。



托鉢僧

私が家のあちこち覗いている間、ピーターは縁側で家主と交渉していた。無表情な顔と態度の厳粛な男は、深刻な無関心さでピーターの説明に耳を傾けていた。なぜ外国人居住地である築地の外に離れて住みたいのか、彼には疑わしい謎だ。彼は、誰がなぜ、何のためにという詳細な調査に時間をかけた。彼の建物に連れこまないよう冷却な決意を持ってピーターの甘い言葉には乗せられなかった。彼は我々が頑固だったのと同じくらいしつこく質問した。

ついにピーターは私に向かって「彼女は一年以内だと貸すことができないと言っている。外国人に貸すと家がだめになるから」

私に促されて彼はこの点について頑固な男を安心させることに成功し、最終的には六ヶ月借りるという私の提案に耳を傾けさせて勝った。この時まで私は鋭さの欠けた年寄りの家主と思っていたが、そうではなかった。根気強い通訳者（ピーター）がこちらに向いて頭のさえた大家が新しい計画を生み出したと私に告げた。

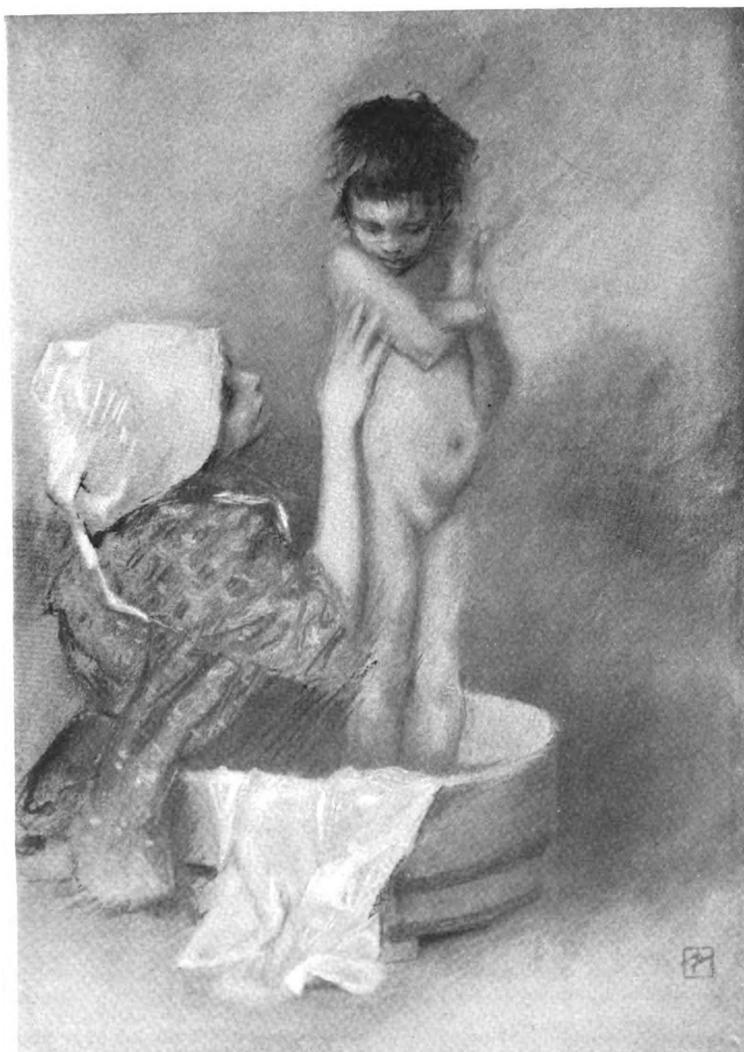
「よろしければ保証金を払ってくれと大家さんは言っている。」

「やれやれ、なんてこった！他に何かあるのか。私はここを借りただけだ。べつに家を所有する気はないんだと言ってくれ。」

私は少し疲れてせっかちになっていた。我々は完全に堂々巡りをしていて一時間前と同じ所に戻っていた。家主はしゃがんで絵のごとく不動だった。仏ですらこれ以上無表情ではいられない。

便利な場所を探し始めて既に一ヶ月も過ぎていた。家探しは他のものと同じような経験ばかりだった。私の心からこの問題を追い出すため私はこの取引を飲んだ。彼の過酷な条件を私が迅速に受け入れたことによって老紳士を驚かせたかもしれないが、そ

れはちつとも彼の顔に現れなかった。私は安心したからではなく新しい問題が発生しないようにとピーターをせきたててさっさとホテルへ帰った。



入浴

有楽町三丁目一番

東京、1890年9月1日。

「親愛なる-----へ：私は新しい家から君に書いている。

私は二日前にホテルから荷物を持ってきた・・・

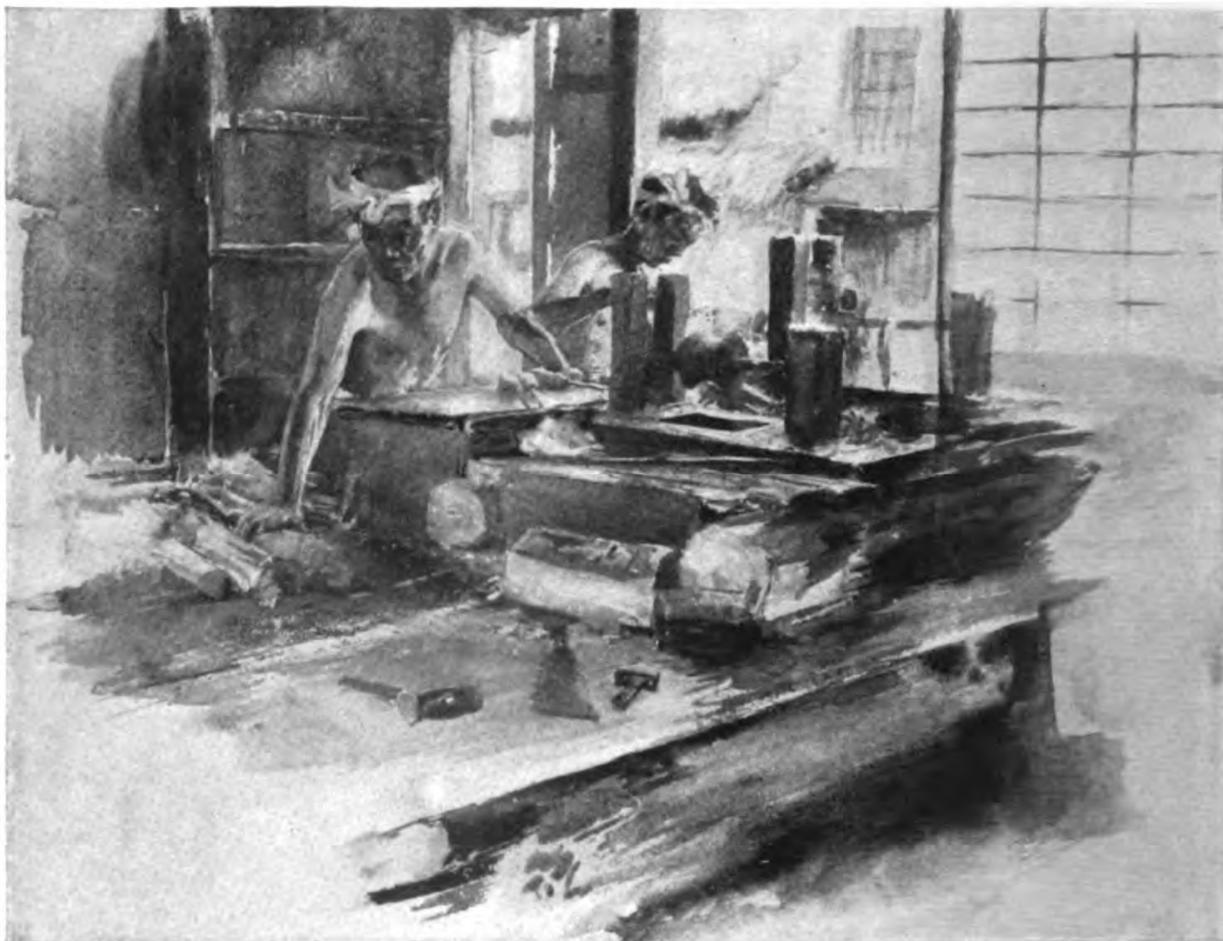
家は小さくてちょっとしたものだ。一階に10フィートの正方形の大きめの部屋がある。それから二つの小さな部屋、両方一緒にだいたい大きな部屋と同じ大きさだ。別の小部屋と台所が残りの部分を占める。次に、二階には床の間付きの一部屋。家の二辺にある縁側は私に日光をたくさん与えてくれる。あなたに良く分かるようにここに二階のだいたいの図面を描く。この家は「有楽町（楽しみのある道）」にあることを言わなければならない。私がここの住民になって以来、これまでその名前と矛盾していない。家は、通りの突き当たりであって実際に道はうちの門に突き当たる。私は幸福の非常に頂点にいるのを感じてはいけない理由はない。

葛飾さんの助けなしではどうしてできたか、私には分からない。彼の巧みな世話のおかげで私はここにいる。彼はこの二週間、非常に重要で忙しい人だった。私の仕事の合間にちょうど手を休める事が可能な時に彼はちょくちょくやってきてはたいした物ではない木の簡単な家具を集めてくれた。お風呂を作らせ、敷布団と掛け布団を注文した。等々。私としては十分興味深い事なのだが君にとっては大体の事が聞きたいだけで重要な事ではないだろう。

私はどこから始めようか。何について書いたらよいか迷う。何かを伝えようと思う時、どういうものかを分かってもらうには詳細を書かなければ伝わらないと思うと、書くのを怯む。路上で見るあらゆる小さい事は私に大変興味を起こさせる。見ること自体が私に洞察力と思考の糧を与えてくれる。例えば、今日、通りを歩いていて—ここではいつもやっている事だが—女の子が背中に弟である赤ちゃんをおぶっているのを見た。弟が落とした紐を拾うのに彼女はかがむのではなく、静かに下駄を脱ぎ紐をつま先に挟み、よろけないように手で柵をつかんで弟の伸ばした手に足で紐を渡した。しかし、いかに日々の仕事をこなすため人々が自分の足と足先を一般に誰でも利用するかを自分で見ない限り—どんなに面白いかわからないだろう。私はいつも何となく竹馬に乗って歩いているような気がする。日本人は小さな種族であるということだけではなく、すべてが私よりずっと下で、地面の近くで行われているという事実を通しての感覚だ。通りを歩いて、私は簡単にお店の軒先に触れることができる。仕立屋、大工、鍛冶、パン屋、傘の骨作りは強い腕と同じように、足と足先がもう一組の強い腕としての役目を果たす。すべてしゃがんでやる仕事だ。しかし、やはり私は見ている物を次々と目録のように伝えているようだ。結局こんな事になる。君に何も与えていないという事だ。私にとってこういう細かな事は桜の花の上の灰色の空のようにすべての上を覆っている光、生活、精神、魅力なのだ。

すべてが、外国人居住地の外に住むという政府からの許可さえもがうまくいった。そして私が葛飾さんの個人教師として暮らすという多少咎められるべきごまかしをして得られた。今新しい家庭生活が急に始まってどんな印象かと言う事は私に聞かないでく

れたまえ。それは大きな、からの文房具箱を手に入れたようなものだ。障子、扉や窓、あまりにもたくさんのつやつやした紙にあふれている。まだ実際の日常生活というより何かで遊んでいるようだ。この目新しさがなくなるまで、話す価値がない。



日本の仕事場

1890年9月24日、

さて、親愛なる君、私の蝶の羽のホコリは完全に払い落とされていない。なりゆきをみて慎重にやればうまくいくが、注意を怠ればうまくはいかないだろう。そして「親しさは軽蔑を生む」という状況になりがちだから嫌われる事のないよう、押し付けがましい愛想よさを控えて不快感を与えないようにしている。

新しい家庭といえば、彼（葛飾さん）の役割を何と呼ぼうか、それは私を当惑させる。友人、仲間、ガイド、召使、または主人？ これらのいずれかにもなるし、またまとめたすべてでもある。友人や仲間、私がそう扱おうと選んだから。ガイド、私がかうまく日本語を話せないから。召使、ほとんどの忠実な子分より良く仕えてくれる。確実に、

私の主人だ。私は怖い法律の元で彼の召使とみなされているから！ 他に、お栄さん、賞賛に値するミス・オエイ（富）。彼女は短い言葉と同じように小さいが 富を意味する名前が示すように、鉱山ほどの価値がある。家をやさしさと幸福な気質で楽しくしてくれる。そして最後に、私が「白黒」と呼んでいる短いしっぽの子猫。しっぽはつかむのには短すぎるし部屋だって猫をつかんで振り回すには狭すぎるから、誰もつかんで振り回そうとはしない。私はほんの少し前に庭で彼女を見た。彼女の日々の使命、トンボを捕まえる事で忙しい。ところで 庭は私が最初にここに来て以来、やや見栄えが良くなった。植物は封建時代からあった皇居を囲む古代の堀の土手をよじ登っていつか夜に私と一緒にそこに座ってみよう。青白い顔の蓮の花と萎んでいく睡蓮を胸に抱きながら眠っている水を見ることができる。夕暮れに反対側を行ったり来たりする提灯も見える。蛍のようだ。大規模な都市の中心部は、ニューヨークよりも家屋が多いのに、田舎に住んでいるように感じる。頭上の木々の葉の擦れる音、絶え間ない虫の音、そして唯一のたまに聞こえるかすかな三味線、歌い手の声を伴っているとなお奇妙だ。いぶかしげな君は小さな灯りの群れで、「銀座」つまり東京のブロードウェイから目と鼻の先にいることを実感するだろう。

1890年 10月 13日

私の日々の生活のことを伝えてくれと君は頼んだ。君が言うように、どんなに珍しいものでも習慣を通したら当たり前になる。私はハエが琥珀の中に入る方法を見つけたように自然にこの新しい存在の中に入っている・・・私の一日の様子を君に書いてみよう。中心人物に関連する詳細だけを考えているので 背景が曖昧だったりぼやけていたりしても私を責めないでくれたまえ。

背景は、東京の小さな家の二階にある部屋の暗い内部。すべての和室のように、ほとんど何もない。壁に掛かっている恋文を読んでいる少女の掛け物と隅の箆笥（引き出しのセットだ）が、装飾や家具のすべてだ。清潔な畳の床の真ん中にくすんだ青色の布団が二つ、三番目はサーモンピンクの絹の掛布団が敷かれている。この家の主がそこに寝ている。小さな女中さんがお茶のポットとトーストのお盆を持って入ってきて家の主は起こされる。

午前7時15分だ。お栄さんは彼女の膝をついて、取るのに便利なように近くにお盆を置いた後、一瞬のうちに丁重に両手の間の頭を畳につけておじぎする。それから立ち上がって縁側に出て毎晩閉じられている薄い雨戸を強く引き開ける。私が朝食を食べている間に葛飾さんが庭にある植物の多くの鉢植えの中の一つを持って現れることがある。それから風呂に入る。ところで日本では夜入る習慣なので、私は朝入るから、時に

はいくらかの小さい家の中の日課をじゃましてしまう。その後、一日の仕事を開始する準備が整う。モデルが庭でポーズしない場合は、私は、外出する。ここ数日は、徳川時代の六人または八人の将軍が埋葬されている芝のお寺の境内へ行っている。内緒だが実は私は、外出がいやだ。文句は言いたくないが、静かで控えめではあるが多くの人がじろじろ私を見るからだ。それは外出を非常に不快にする。私はイーゼルの周りに満ちたり引いたりして集まるヨーロッパの群衆に慣れている。どちらかと言えば、ヨーロッパでは元気付けられるがここでは息のできない空気のよどみのようだ。あまりにも長い間イタリア、スペイン、オランダなどでパンくずを拾っていた頑固な年寄り鳥なので尾を踏まれなければ人間は怖くない。しかし巨大な群集は無敵の葛飾さんでさえ私を救い出すことに自信をなくさせ無力にさせる。



「旦那、乗ってください」

滑りやすいモデルを私の網の中にやっと捕まえるのに数週間、あるいは数ヶ月もかかることもある。

夜はやることも見るものも何もない。通りは暗くなった後は静かになる。それが祭り、寺院の祭日に時々花を飾ることがない限り、わくわくするものは何もない。その近代化した店の並びと大掛かりな電気照明の銀座でさえ鈍い覚醒の数時間後に静かに眠りに落ちる。十時半過ぎに最後の行商人たちは、びっしりと縁石に並んだ、古いものと新しいもの、下駄やわけの分からない奇妙な道具など役に立つものから、純粹の飾り物、疑わしいうるし、ぼろぼろのついたてまたは薄汚い掛け物まである彼らのごちゃまぜの所持品を集め、それらを風呂敷の束にして肩に負うと、うとうとしながら閑散として灯の消えた通りに沿って転がるような足取りで再びつましい家に戻っていく。

十二時かその頃、私は昼食のため家に引き返す。普通は遠くなければ歩いて帰る。人力車、それは常に活発だが、葛飾さんと私たちに呼びかける「旦那、乗ってくれませんか」、または「私はちょうどあなたの行く方へ行きますから、安くしときますよ」「こっちの車にどうぞ」。午後はモデルと庭で仕事をする。それが今日のようにモデルを探しに出かける。それはいつもどきどきする。私が内気なのか、それとも自分が危ないところに入ってしまったって逃げられなくなるんじゃないかと心配しているせいかわからないが、

私はといえば、ずっと前に小さな書齋に上がり、仕事を見直し、どうすればいいのか考えている。または読書、喫煙、そして夢想している。今夜やっているような事、手紙を書いているなければの話だが。



娘、夜

雨が多く荒れた天候の不安定な秋は、終わりに近づいていた。多くの菊祭りが台無しになったのを惜しむ声は聞かれたがそれ以外、秋の天候の不快感は日本人の心の平静を乱すことはなかった。

その後、荒れた天気を一掃して 澄んだ空の明るく新鮮な日々が来た。さわやかな空気はまるやかなアメリカのインディアン・サマー（小春日和）を思い起こさせた。少しずつ寒くなっていったが毎日の違いはさほど感じられなかった。強風は止み、空気は静止していた。これは「小寒」つまり「少しの寒さ」だ。この時期はアメリカではみんな憂鬱な気分になるが、ここではその気持ちは全くない。新しい年への入り口へと私たちを導いた。

差し迫った新年のお祝いの準備にふさわしい、浅草と神田の寺で夜の「祭り」の時期だ。広い寺はすべて新年に関しての品を売る売店で賑わっていた。おもちゃや家庭用品の店が立ち並ぶ。特に目立つのは伝説でおなじみの人物で飾られた羽子板の華麗な陳列だ。（より複雑なものは、6ドルか7ドルもする。）お正月の間、門の前に下げる編んだイグサとねじった藁の象徴的な飾り、簡素なあるいは金色の小さな神社、家庭用の祭壇のために、金属で作られた妙なもの、台、茶碗、ランプ、書いた板など。寺院へ行く道は老いも若きもで詰まっている。また売店で混んでいる寺の境内に到着しても人の流れは全く良くはならない。割り込んだり押し寄せたりする塊の中にいるのはいらいらさせられるが、人々の静かで秩序ある振る舞いで緩和されている。あちこちどこを見ても、ほうき、その他の家庭用品、おもちゃなどが危険を避けるため群集の頭の上に掲げられている。忍耐強い親に肩車してもらっている頭をそった小さな子供は、熱っぽい目をギラギラさせて途方にくれ困惑しているように見えた。

1891年1月1日

「親愛なる-----へ：新年は椿や梅の花で幕を開けた。我々日本人は他のすべての休日より大切なこの大きな休日のためにすべての通りを庭園のようにするのにこの3、4日忙しかった。方々歩いて回ったのでけっこう混乱したがいくらか見てきたもののうち少なくとも君に新年の漠然とした印象を与えられる事を望む。

えーと、それから（私にはさっぱり分からないが）旧暦では日本のお正月は遅くて私たちの一月末または二月の初めだったが、グレゴリオ暦を採用することにより、我々の休日がそうであるように 休日となる日を固定した。ある意味で、それは厳密にきちんとみんなが参加する唯一の休日である。みんなに浸透している安息日の雰囲気の特異な一日。しかし、アメリカの私たちの休日のような特徴的なひどく真剣で荘厳な儀式がここであったとは思わないでくれたまえ！アメリカでは清教徒の信仰が休日の喜びを取り去って悲観的な日にしてしまったが、ここ釈迦の教えの強い国では、そういう気持ちはまだ欠けている。私は質素な日雇い労働者から忙しい店員までみんなに完全な休息があったという理由だけでそれを日曜日に例える。というのは、通りには多くの人々がいたにもかかわらず、空っぽで静かだと感じたからだ。

ほぼすべての家の玄関の前に、いずれかの側に、様々な様式の木飾りがある。これらは地面に打ち込まれて固定された松や竹で主にできており、各々は象徴的な意味を持っている。丈夫な松は嵐を耐えてきた人生を表す。竹は、その直立の成長と過ぎた年の節で、強健な人生と充実した年を示す。数々の機能を備えた複合体もある。私の一番うまい説明は、おそらくそれは、ドアの上に、左右に延びるイグサの縄である。この縁取られた縄の中央に固定されているのは数個の物体だ。最も目立つのは年の重さで曲がった事をほのめかす緋色の伊勢海老やオレンジのような橙だ。前者は年にとって曲がった

体が長寿を表し、後者は語呂合わせで「橙」という単語は「代々」、家族の子孫が代々繁栄するようにとの願いをこめている。いろいろな種類の葉がある。若い葉が出芽している間、その古い葉を保持し、子供や孫の真ん中に繁栄する両親を象徴するユスリ葉、そしてシダ状の植物、同じ茎から組になって出ているので夫婦の意味だ。一つ一つが、またすべてがある独特な意味を持っている。

私が前にも言ったように、通りがにぎわっているにもかかわらず、妙に見捨てられたような感じだ。確かに、もじゃもじゃとはえた小さな店は、この日に限って閉じられる。シャッターを下ろした非常に多くの店は出荷の準備ができたたくさんの箱のように見えて面白かった。あちこちで、長い間隔をおいてだが開いている店もある。薄汚い青や赤の陽よけのカーテンがひらひらゆれ、白い大きな文字で名前を派手に書いてあるもてなし茶屋。込み合っただけ小競り合いしている男の子たちが派手に飾られた凧を選んでいる半分だけ開いた店。

髪にたくさん油を塗って、念入りにお化粧をしたあでやかな色の何か歌っている女の子たちの頭には広がる晴れた空の青の色が髪に反射している。新年のあいさつに友人、知人、またはパトロンを徒歩か人力車で訪ねて行き ひらひらと飛び回っている。流行の蝶である若い女性と競っているのはよそ行きの着物でおめかししている子供たちのおしゃべりな群れだ。休日の地味な着物の大人の群れの中に点々と明るく目立っている子供たちがいる。あちこちで小さなグループがきびきびと人込みをぬって歩いていく。男性はいつもかなり前を歩き、素直に後ろからよたよたとついてくる女性たちに無関心だ。すべてはその日の儀礼的な訪問を実施するためだった。訪ねる途中の 出たり入ったりする様子がどこでも目についた。扉の傍にある、かがんで通る小さなくぐり戸を一人ずつ通るのを見た。木製の格子を通して玄関がちらっと見え訪問者と家の住人との間で何度もお辞儀が交わされるのが見えた。挨拶するのにちょっとした時間がかかる。みんなが季節の挨拶をし終わりやっと満足して、それからやっと下駄を脱ぐ。清潔な畳の上を客間に案内されるまで説得されるのもなかなかのものだ。客間は聞くところによると、興味ある規定の社会的な儀式が行われるらしい。礼儀正しさは、私達には美德に過ぎないが、ここではほとんど息をするのと同じくらい生活に必要なものだ。

この日はまた、たくさんの変化に富んだ帽子の展示の日だった。日本人男性の服装の不釣り合いは、見るに耐えない。私は突然、思いがけず、正装の年配の男性に遭遇した。綿のきちんとしたはめにくい手袋、思慮深く止められたコートの中の二つのボタン。しわや不似合いの服で不恰好だった。しかし、何より私の神経をうずかせ自制できないかもと恐れさせたのは「帽子」だった。その帽子は古臭かった。そのつばの曲線は、棚の上に長いこと置かれていたせいで、くせのある不格好な線で威嚇するように額に落ちて着いていた。間違った方向にブラシをかけ、いかがわしくみえる。帽子の光沢ある誇りは

永続的な侮辱に屈していたし、代わりに毛羽立ったもつれとなっていた。それにもかかわらず帽子は自信にあふれ はつらつとしていて、優位性にあふれ、いわば、超然とした感じだった。覆って保護すべき意気地なしの頭を守る責任がある誇り高い帽子の苦境を私は想像した。帽子への思いやりを悟られないよう急いで見て見ぬふりをした。老紳士は穏やかに歩いて行き好奇心を起こしてじっとみる人は誰もいない。私はユーモアのセンスはわずかな違いに依存していると思わざるをえなかった。彼をニューヨークのブロードウェイに置いてみたらどうだろうという想像を止められなかった。ブロードウェイでのみんなの反応はどうだろうと考えてしまった。

正月にはみんなが仕事を休むと私は言っただろうか？ いや、みんな休むわけではない！ 太陽が暖かく輝いていた空き地で 疲れ知らずの努力と口の達者な講談師はふらふらと近くにやって来た人たち、一瞬だけ立ち止まったが 冷たい無関心さでさっさと立ち去った人々をつかむのに今日は失敗したものの、この人たちは翌日再び何時間も集まってくるだろう。言葉をうまく操って話を刺激的な最高潮に持って行くので聞いている人たちは辛抱強い奴隷となってしまう。ずるがしこい語り手は突然語るのに興味を失ったふりをして話を止めてしまう。小銭が投げ入れられる音を聞くとまた続いて女主人公がもう一度彼女を追いかける悪人から安全に逃れるという物語を語り始める。みんなほっとして続きを聞く。けれども正月の義務で占められている今日は聞き手はみんな忙しく立ち止まらなかった。孤独な飴屋も、彼の派手に飾られた屋台の後ろに力なく座っているが より小さな子供たちも客にはなってくれない。みんなは羽根つき合戦に夢中だ。すべてを忘れて遊んでいるのはぶんぶん言いながら空高く舞う白い四角の紙、凧をあげている子供たちだ。アメリカで7月4日の独立記念日に爆竹をならすように新年は凧なしでは完全とはいえない。



飴屋-やじ馬

新年のお祝いは、週の大部分続いた。リボンや何かで飾られた押し車の様々な組合、企業、商人の行進の後、同じようににぎやかな火消し⁸の出初め式があった。それがやっと終わると興奮した日々は東京の日常の静かで平穏無事な日々落ち着いた。

⁸著者ブルームによる注：50から60の数の火消しのグループがあり、各々は40人から60人の男で構成されている。西洋製の非常に非効率的な消防車がわずかにあるがほとんどは簡単な手動ポンプだ。毎年1月の3日と4日に出初式がある。それぞれの駅で、男たちが集合し行進を始める。彼らの新たなのぼりや記章、「まとい」を運ぶ - (大きな厚紙で作られた絵のように美しいものだ)。そして手押しポンプ、梯子、明かりなど。行進は一時停止し、梯子を立て一人か二人の仲間がその上で鳶口を使ってバランスを取り軽業を披露する。この間他の仲間は高い声で声援を送る。梯子から降りてまた行進を続ける。様々な火消しの群れは最終の観覧にむけて上野公園の大規模な空き地に集まる。



桜

ぼんやりと過ごしたのろい冬に続いてすぐ春が来た。目もくらむような美しさが突然始まった。3月、「桜月」、咲き始める月の最終日には、桜は文字通り繊細なピンクの素晴らしさの栄光と香りで私たちを圧倒していた。

おそらく君が聞きたいのは、集団脱出の事かもしれない。花見のため上野、芝、向島、および他の郊外に出かけ、東京の人口がほとんど減ってしまう。そして花への感謝は心からのものだ。「桜狩りに行く」、または桜の花を見ることは、国民の祭日になってきている。

しかし、私はすでに大幅に私に割り当てられた枚数を使っているので、ここで良き友人たちと一緒にいった日光と伊香保の旅の印象をまとめねばならない。

旅は 初めは場所や時間などの明確な計画はなかったが だんだん具体化していった。私がアメリカへの帰国しようかと思いだめたのがきっかけでこの旅が実現した。温かい心の医者の妻が短い手紙に書いたように「万歳、男性たち」のピクニックだ。準備のうち料理部門の精巧な詳細はコックさんたちにまかせた。たっぷりある荷物は肩にかけたイーゼル、傘、スツール、邪魔になる戦闘で傷ついたスケッチ用具一式。

私たちがいつ、いかに出発し途中で何が起こったか、坊さんに一時的に空けてもらった日光の二軒の家は無事に着くまでのことは省くが 興味のあった事すべてのほんの概要だけ述べる。

村は 鉄道の駅から川まで続く長い曲がりくねった道からなっている。巨大な木々の間から見える川の反対側は有名な寺院だ。この激しい流れに橋が二つ架かっている。一つ目、赤い漆の橋は神聖なものでミカドがお出ましになった時のみに使用する。もう一つの粗末な日常の橋は、墓への道に続く。二人の輝かしい将軍、家康と家光の壮大な霊廟は、深い青々とした涼しい山の中心地にある。周りの薄暗さから輝いて浮き出ている、ずっと後で夢の中に出てきそうな感じだ。金と白と繊細な色の輝きが人々を感動させる。美しい音楽を聞いて、その「息をのむ」という感覚と同じ感情を起こす。すべての邪魔になる事柄からの絶対的な沈黙と分離だ。この場所は、色がすばらしくて豊富な旋律で満ちているようだ。その混ざった音量と和音、旋律は純粹で、強くて自由だ。それは太陽の魅惑的なタッチでこだまする。

リコ⁹がもしここにいたら大いに喜ぶだろう！この多彩な色合い、金と銅の太陽の輝き、乳白色の柱に光と影の動き、大胆に彫刻された扉や間仕切り、重い屋根の黒い瓦と背景の木々の緑の葉の巧みな対比によって、彩色された木造物の豊かさの上に当たる日光の熱烈な輝きを表現する方法を知っているのは彼をおいて他にはいない。

⁹訳注： 3

どのようにフォトゥニイ¹⁰は、魅力を鋭く分析することによって表面下に浸透させ、私たちがうっとりさせるだろう！ここに染み付いている神秘的な東洋の精神を生き生きと本物に描くのは彼のような微妙な魔法の天才以外にはできない。

木彫りの芸術は、頂点に達していたに違いない。このすばらしい結果を得るために、装飾芸術の最も自由な表現に達したのだ。この国の中でも最高の寺院だ。

私は特に家康、徳川政権の創始者の廟は、孫の家光のものより個性と魅力が無限でより洗練されていて好ましい。家光の廟は徳川家の代々の将軍が埋葬されているくすんだ芝の寺院の技術よりそれほど優れているわけではない。

確かに、彫刻、彩色そして金を施した木工品の絶妙な美しさがある。すばらしく魅力的だ。もし建築も同じようにすばらしければ、結果として世界の最も価値のある記念碑として仕上げられたに違いない。しかし建設的な能力より装飾が勝っている。小さい物造りにいかに優れていることか、大きな物を造るにはいかに気が小さすぎるのか。日本人が実際にそうであるように。ここは特にそう感じるので悲しくなる。

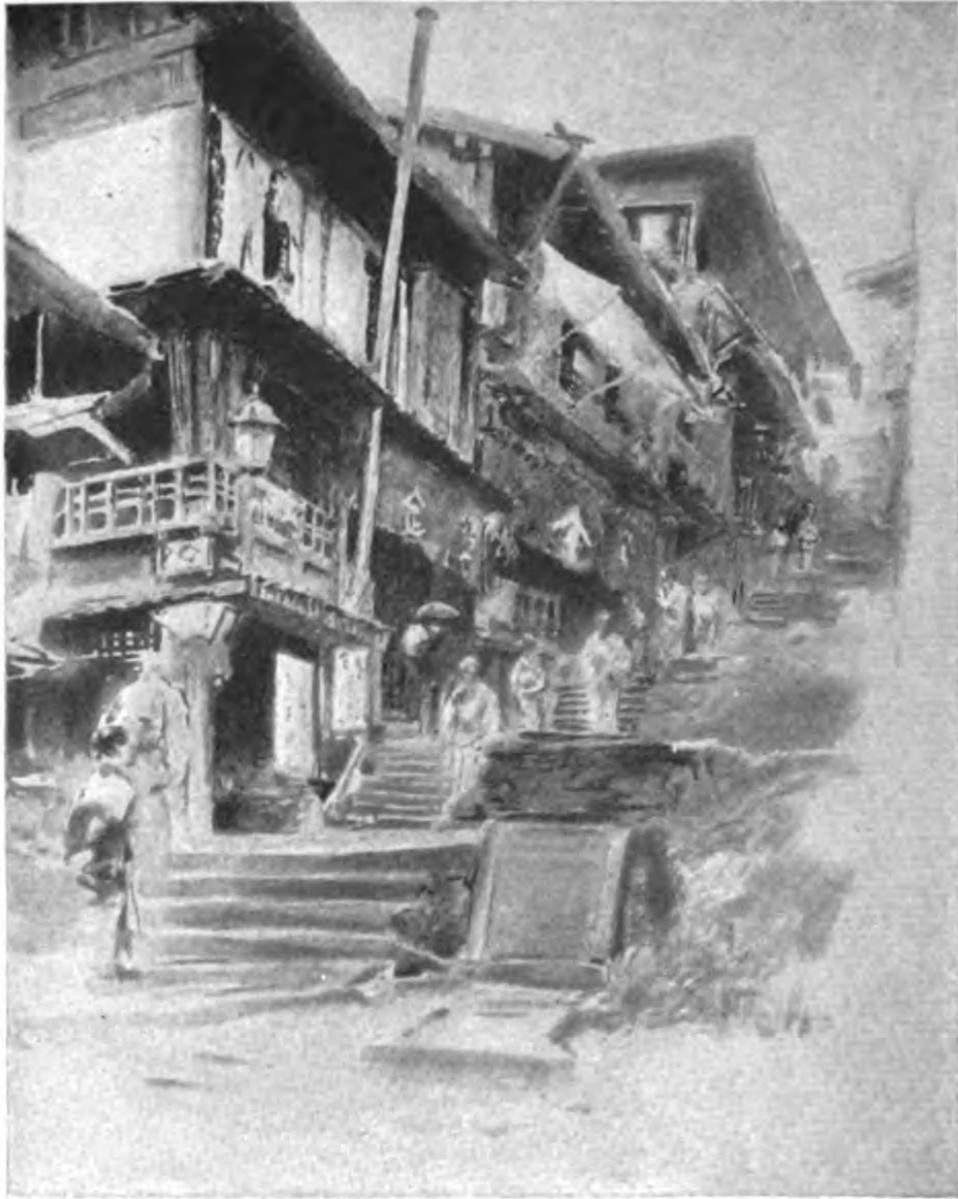
他の一方で、質素な伊香保は誇りの「日光」¹¹の堂々と近寄りがたい貴族的な素晴らしさの極端な反対で絵になる「ぼろと切れ端」の場所だった。我々は日常のおなじみの俗事に非常に魅了され、すぐに気に入った。すぐさま熱心に仕事にかかった。写生道具の紐を解き、イーゼルとスツールを通りに置いた。これを見ても我々の生き生きとした熱意、情熱が分かるだろう。



日光、祈る人

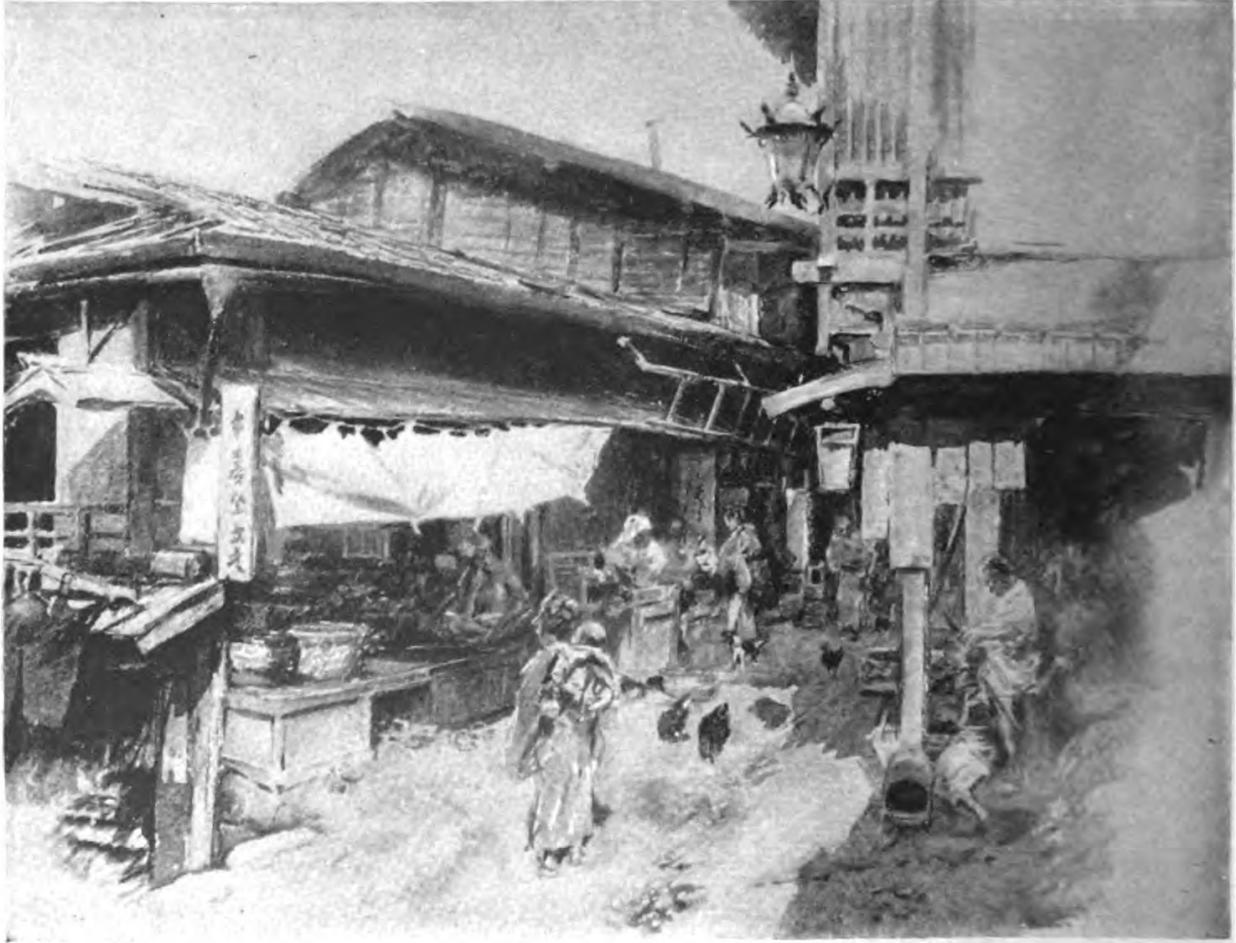
¹⁰訳註：Mariano Fortuny 1838-1874、スペインの画家。ブルームが最も感銘を受けた画家

¹¹著者ブルームによる注：日光はまた、「晴れた素晴らしさ」を意味する。日本のことわざ：日光を見ずして結構と言うなかれ。



無数の石段

山の険しい斜面に構築された伊香保はユニークな眺めの通りを形成する無数の石段を登っていく。その特質のため普段見られない角度を求めての珍しい機会を提供してくれる。梯子のような通りや家が空に登るように層になって建っている事で、町は他の日本の村と明らかに奇抜なコントラストとなっている。他の村では絵になるのは全体ではなくて個々の物や孤立した物などの「小さなかけら」に制限される。快適さを愛する観光客の流れから伊香保は遠く離れているのでたどり着くのに面倒で時間がかかる。そのおかげで昔風の魅力と礼儀が保たれている。我々にとっては新鮮で心地よい。外国人に慣れている町のがっかりするような交流ではないという違いを感じた。



伊香保の通り

我々はいつまでも長く滞在したかもしれないが、週の終わりに厳しい嵐が来た。何週間も続く憂鬱な雨季が目の前だ。下の世界と再び道を通じる前に、肌寒い旅館に4日間も閉じ込められた。まだ雨が降っていたが、我々は脱出するために比較的小止み状態を利用した。道路はすべて洗い流され通行止めで、駕籠と椅子に乗ってひどく疲れた。Idzuzu（井筒？）の鉄道までの六時間の距離だったが、私たちの小さな一行は迂回したためずぶ濡れになった。



伊香保の建物

一ヶ月後、私は蒸気船の甲板から輝いている空と下の夕方の海の間で 黄金のもやの中、夢のように次第に消えていく大地を見ていた。